

シンポジウム ㊦

話題提供 ①

# 子どもを支える地域のつながり

——ソーシャルワークの視点から

大坂 純 (仙台白百合女子大学人間学部教授)

東日本大震災から5ヶ月が経過し、被災地が復興に向け、歩を進めている報道が中心になった。東北の夏祭りをきっかけに、多くの観光客も訪れるようになっている。仮設住宅や民間賃貸住宅を借り上げた応急仮設住宅への転居が進み、被災者を取り巻く環境も落ち着きを取り戻しつつあるように見える。しかしながら、生きることだけで精一杯だった頃には気づかなかった生活上の課題が、新たに生まれてきている。

家族を失い、悲しみに暮れる間もなく生活の立て直しを行ってきた被災者たちは、住む家が見つかり、子どもが学校に通うようになり、職場に復帰し、日常が戻ってくると、その日常が非日常であることに初めて気づくことになる。

例えば5人家族であったはずが3人を失い、家事や仕事、子どもの世話等に追われる生活は、本人の適応能力をはるかに超えることである。しかし、表面的には住む家も見つかり、子どもも学校に通いだし、仕事に行く毎日は、日常を取り戻したように錯覚され、被災者が抱える環境への不適応に目が向けられることは極めて少ない。子どもも、普通の生活を送っているように見えて、家族や友達を失った悲しみを抱えながら生きている。

被災地には多くの支援者が来て、「心のケア」の重要性を訴える。しかし、「心のケア」とはなんだろうか。津波によって数分間ですべてを失った人達の心をケアするとは、どんなことをさすのだろうか。

我々は同じ被災者として、震災後1週間程たった頃

から、津波被害にあった地域におにぎりを届けていた。温かいおにぎりを食べさせたい、ただその一心であった。子ども達は温かいおにぎりに頼りたり、おにぎりを持ちながら笑顔を取り戻していく。数日、満足な食事をしていないにもかかわらず、「自分達は年寄りだけだから、おにぎりは1個でいい。隣の家は子どもが多いからそっちにうちの分もやってけれ」と話す方もいた。こんな状況下でも互いを思いやり、支え合おうとする文化が生きている。

被災者は弱い存在ではない。一時的に力を失った状態に陥っているのであり、彼らは彼らのやり方で生活を取り戻していく力を持っている。東北には互いを思いやり支え合う知恵と文化が息づいており、支援者はその文化を理解し、大切にしながら支援することこそが被災者支援であると考えている。

支援は、時々刻々と変化するものである。被災者は毎日の生活の中で変化を感じ、その適応を迫られる。時間が解決することもあるが、時間が問題を大きくすることもある。支援者は被災者に寄り添い、その時々被災者が力を発揮できるよう支援することが重要であると考えている。

## —プロフィール—

大坂 純 (おおさか・じゅん)

1984年、日本社会事業学校研究科を卒業後、仙台市立病院医療福祉相談室に勤務。2002年より仙台白百合女子大学に勤務。社会福祉法人ありのまま舎理事長。特定非営利活動法人 雲母倶楽部理事長。主著に「地域福祉の原理と方法」第5章 地域福祉の主体と実践(学文社)。

